

文 シュザンヌ・ウォン
イラスト ピエール・モルネ

スタイルと 本質

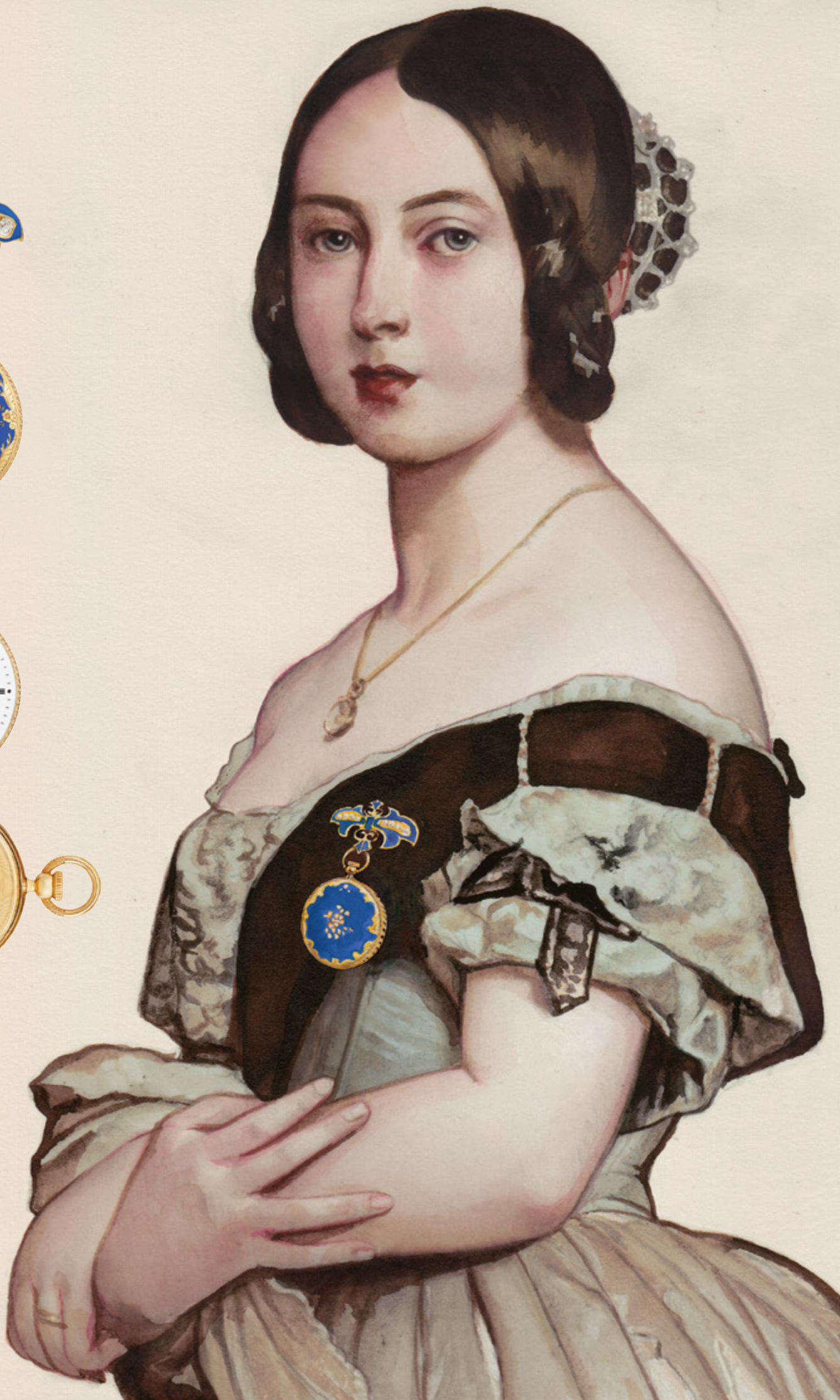
婦人用タイムピースは、その歴史を通じて、魅力的なフォルム、繊細なデザイン、見事な装飾によりドレスを引き立てる役割を果たしてきたが、これらの作品に真の意味を与えるのは、高度な時計製作技術を微小な空間に収めるために要求される、先駆的な創意工夫である。

シャトレーヌ・ウォッチ
(腰鎖付時計)は、婦人用胴着の裾のベルトから腰にぶら下げるようにデザインされている。
ジュネーブのパテック
フィリップ・ミュージアムに
収められたこの直径53mmの
時計 (Inv. S-411) を彩る
七宝細密画は、ジャン・ルイ・
リヒターの作。古代ギリシャの
物語中の恋するダフニスと
クロエが描かれている。
このシャトレーヌ・ウォッチは
1795年頃に製作され、
ムーブメント No. 11 585を搭載。





ヴィクトリア女王が直径33.2 mmのムーブメントNo. 4536搭載オープンフェース・ペンダント・ウォッチ (Inv. P-24) と、これにマッチする取り外し可能なブローチを着用した様子を想像したイラスト。この時計は、1845年に特許を取得したジャン・アドリアン・フィリップの革新的な竜頭巻き上げ・時刻合わせ機構を採用しており、1851年のロンドンの万国博覧会で女王に献上された。イエローゴールドの裏蓋は、彫金の渦巻模様、ラピスブルーの七宝、ダイヤモンドで装飾されている。



(上2点) バジル・シャルル・ルロワが1800年に製作したこの直径52 mmのメダル型ウォッチ (Inv. S-1048) には、秘密のメッセージが隠されている。配置された宝石の頭文字を12時位置から時計回りにつなげると、「heures d'amour (愛の時)」と読むことができる。当時のファッションは第一帝政様式であり、表面装飾や白以外の色彩が再び流行し、新古典主義の影響は薄れつつあった。(下) このパテック フィリップ歴史資料の販売台帳には、1851年11月30日に時計

No. 4719 (Inv. P-27) をヴィクトリア女王に販売したことが記録されている。この鍵巻き上げ・時刻合わせ式、直径30.5 mmのオープンフェース・ペンダント・ウォッチは、空色の七宝地にローズカット・ダイヤモンドの花束をあしらった裏蓋を備え、同年春からロンドンで開催された万国博覧会に出品された。この時計は、1850～1851年に製作された次ページの例を含む、世界最初の鍵なし時計数点と共に展示されていたと思われる。

20世紀以前においては、いずれの性別のために時計がつくられたかを判断する最も確実な方法は、その時計がどのように着用されていたかを確認することであった。腕時計が個人用の時計として主流になったのは、20世紀初頭から半ばにかけてファッションが変化し、時計技術の進歩により腕に着用する小型のタ

メーターを着用することを目的とした、明らかに女性的なデザインの作品を除けば、時計を紳士用、婦人用に分類することは難しいのではないだろうか。

ジュネーブのパテックフィリップ・ミュージアムを訪れば、これを確認することができるだろう。ミュージアムのオールド・コレクションには、16世紀初頭につくられた(据置または携帯できるクロックではなく)身に着けることのできる初期の個人用時計のいくつかが含まれている。またパテックフィリップ・コレクションは、1839年の創業から現代に至る同社の歴史全体を網羅する、広範なタイムピースを所蔵している。歴史的に女性が所有していたことが確認されている特定の作品や、ジュエリーとして着用することを目的とした、明らかに女性的なデザインの作品を除けば、時計を紳士用、婦人用に分類することは難しいのではないだろうか。

婦人用タイムピースとは何か。このカテゴリの時計はどのように定義されるのか。ブランドや販売店がどのように時計を分類しているかを観察すると、ケース径を紳士用と婦人用時計を分ける基準として用いているように見えるが、そこにコンセンサスがあるわけではない。40ミリ未満であればすべて婦人用時計といえるかというと、そうでもない。1970年代には、ケース径36ミリの時計は紳士用タイムピースとされていた。ジェム・セティングの有無も、もしかしたら基準になるかもしれない。一般にダイヤモンドをセッティングした時計は、

婦人用にデザインされていると考えられる。しかし現代、ウインター・アンティークの各区分において、このルールには多くの例外がある。もしこれらの定義が役に立たないのであれば、婦人用、紳士用という区別そのものを捨ててしまわなければならない。時計は、程度の差こそあれ、女性的であったり男性的であったりするが、ほとんどの場合、性別に関係なく身に着けることができる。私たちは、自分の好みやスタイルに合わせて、どの時計が自分に合っており、どの時計が合わないかを自分で判断することができる。染色体の構成に応じて、タイムピースの選択をあらかじめ決定される必要はない。



【前ページ】

パテック フィリップは1868年、著名な知識人であったハンガリーのコスコヴィッチ伯爵夫人（イラストは別人）のために、真のスイス最初の腕時計を製作した。イエローゴールドのプレスレットを備え、ムーブメントNo. 27 368を搭載したこの時計 (Inv. P-49) は、文字盤がヒンジ付カバーで隠され、ローズカット・ダイヤモンドがセッティングされている。

【当ページ】

パリを拠点とするポール・ポワレのデザインは、1910年代初頭、オリエンタリズムのエキゾチックな影響とアール・デコの登場で女性ファッションを席巻したが、その後、戦時中の地味な時代を迎えた。婦人用時計は通常、ペンダントとして着用されていた。例えばこの直径40 mmのオープンフェイス鍵なし巻き上げ時計「花綱」およびマッチする鎖は1911年、パテック フィリップが製作 (Inv. P-1064)。



モントル・ア・タクト（触覚時計）は、18世紀末頃に流行した時計である。パテック フィリップ・ミュージアム所蔵のメダル型ウォッチの卓越した例（写真6ページ上2点）は、このタイプの他の時計に比べ、婦人用であることを示すロマンチックなディテールを特徴とする。宝石を用いた大胆な多色のアワーマーカーは、会話の途中で文字盤を見るような失礼なことはせず、さりげなく時刻を感じることができるようになっていた。また配置された宝石の頭文字を順につなげると、「heures d'amour（愛の時）」と読むことができる。宝石名の頭文字によりメッセージを伝える方法は、当時ヨーロッパの宮廷で大流行していたが、この「heures d'amour」は、婦人用時計が、その優れた美的表現力によって、より高い創造的な象徴性と意義を得ていたことを完璧に示す作品といえよう。

このように婦人用時計の着用方法は多岐にわたっており、機能的な価値よりも装飾的な価値が優先されていたとも考えられるが、婦人用時計が紳士用時計よりも品質において劣っていたという事実はない。搭載されたムーブメントに変わりはなかったのである。実際、歴史上最も著名な時計の中には、婦人用に製作されたものがある。例えば、いずれもアブラアン・ルイ・ブレゲにより製作された、ルイ16世の王妃マリー・アントワネットの伝説的な複雑懐中時計や、カロリーヌ・ミューラ（旧姓ボナバルト）のグラランド・コンプリケーション腕時計はその例である。

イムピースが普及したことによる。また航空機の発達や近代的な墾壕戦の出現などの外的要因により、機能的な着用に優れた腕時計が個人用の計時機器として急速に普及していった。それ以前は、腕に着用する「リストレット」と呼ばれたタイムピースは女性的なオブリジェと考えられていた。17世紀の数学者パスカルは、時計を手首に結び付けていたといわれるが、誰が見てもそれは目立つて異例なことであり、上流階級の紳士たちは時計をチェーンに付けてポケットに入れていた。婦人たちは装身具により自由度があり、5ページに示すように適度な大きさの時計をベルトに結んだりボンに吊るしたり、エキバージュまたはシャトレレーヌと呼ばれるアクセサリーにより、時には鍵や鉛入れ、小物などと共に腰に留めたりしていた。小さな時計は、ブローチとして胸元に留めたり、長い鎖で首にかけたり、手首に着けたりした。指輪に取り付けられた時計もあったが、あまりにもサイズが小さいため、宝飾品としての目的に比べ、時間計測は二の次であった。





(左左) 2009年、パテック・フィリップは、レディス・ファースト・クロノグラフ7071モデルと共に、269個の部品から構成され、機能性と信頼性の最適化に関する6件の特許取得の技術革新を誇る、キャリバーCH 29-535 PSを発表した。文字盤には136個のダイヤモンドがセッティングされている。
(左右) 2011年にはレディス・

ファースト・ミニット・リピーター7000モデルがコレクションに加わった。エレガントな直径33.7mmのローズゴールド・ケースに収められたキャリバーR 27 PSは、342個の部品から構成されている。繊細な音色のチャイムは高く評価されている。このような小さなケースにおいて実現された音質の高さは、驚異的な技術的壮挙である。

コレクションの第1作レディス・ファースト・クロノグラフ7071モデルを発表した。これは同社の新しいクロノグラフ・キャリバーCH 29535 PSを初めて搭載したタイムピースであった。続いて2011年にはレディス・ファースト・ミニット・リピーター7000モデル、レディス・ファースト・スプリット秒針クロノグラフ7059モデル、そして2012年にはレディス・ファースト・パーペチュアル・カレンダー7140モデルが発表された。「レディス・ファースト」コレクションにより、パテック・フィリップは、特

に婦人のために創作され、製作された時計にこれらのコンプリケーションを搭載した現代唯一の時計メーカーとなった。しかし婦人用時計の進化の物語には、まだ書かれていない1章がある。ミニット・リピーター、スプリット秒針クロノグラフ、永久カレンダーという3大複雑機能を搭載した、婦人用サイズのプレステージ溢れるグラッド・コンプリケーション・モデルである。詩的に表現するならば、時計製作におけるこの偉大な栄誉には、極小の世界をきわめることによってのみ到達できるであろう。



第二次世界大戦後、クリスチャン・ティオールがニュールックを発表する直前、女性ファッションは再び女らしさを取り戻し、ジュエリーの楽しみも許されるようになっていた。この1945年製作の婦人用腕時計2126モデル(Inv. P-1428)は一見ブレスレット

のように見えるが、上部の長方形部分にスライドさせて出し入れのできる文字盤が隠されている。タイムピースにはダイヤモンドとビルマ産サファイアがバグヴェ・セッティングされており、ジュエリー需要の復活を示している。



(左および右) パテック・フィリップ最初のチャイム・ウォッチは、この1916年製作の統合されたリンク・ブレスレット付プラチナ仕様婦人用タイムピース(Inv. P-594)である。この時計は27.1mmの小さなケースにもかかわらず、時、クォーター(15分)、および直近の5分をチャイムの組合せで知らせる。パテック・フィリップの婦人用現行コレクションにミニット・リピーター腕時計が加わるのは、それから100年後のことであった。

審美的な創造性はさておき、婦人たちに好まれた歴史的タイムピースは、同時に機械工学における技術革新の最先端を行くものでもあった。1851年にロンドンで開催された万国博覧会では、当時の最新技術が展示されたが、スイスから出品には当然、時計も含まれていた。開会を宣言したヴィクトリア女王は、プローチとして着用できるパテック・フィリップのペンダント・ウォッチの贈答を受けた(写真7ページ)。これは1845年にパテック・フィリップが特許を取得した鍵なし竜頭巻き上げ・時刻合わせシステムを採用し、最新の時計製作技術でつくられたものだった。

現代の婦人用タイムピース・コレクションの評価には、しばしば「シュリンク&ピンク」という一句がついて回る。概して21世紀の婦人用時計のデザインは、紳士用タイムピースのサイズを縮め、類型的な女性顧客にアピールする色や素材で飾ることに尽きる、というのがその含意である。たしかに今日の一部の時計メーカーではそうかもしれないが、時計ムーブメントを小型化しつつ優れた美観と計時性能を維持することは、決して容易な仕事ではないことに注目すべきだろう。パテック・フィリップは、以上を自明の前提と認めた上で2009年、「レディス・ファースト」コ

高性能な小型ムーブメントに最初の商業的な認知を与えたのは、多くの場合、婦人用時計であった。



ひとつはつきりしているのは、個人用タイムピースを携帯する方法としての腕時計を最初に着用したのは、婦人たちだったということである。知られる限りスイス最初の腕時計(懐中時計を改造したものでなく、手首に着用する目的でつくられたもの)は、1868年、パテック・フィリップによって製作されたが、そのデザインは明らかに女性向けである(写真8ページ)。スリムなゴールド・ブレスレットを備え、細長いケースにダイヤモンド、七宝、金細工による装飾が施され、文字盤はカバーで隠されている。腕時計が個人用タイムピースの主流となる以前の1916年、パテック・フィリップは最初のチャイム・ウォッチを製作した。この繊細なチェーン付プラチナ仕様の5分リピーター・モデル(写真上)は、アメリカのD・O・ウィッカム夫人(イラストは別人)が発注した。懐中時計から腕時計へと移行するにあたり、まず克服すべき課題はサイズであり、ムーブメントの小型化が腕時計登場の鍵となったことは間違いない。婦人用時計が機械式時計の開発を直接的に推進したと断定することはできないが、これらの高性能な小型ムーブメントに最初の商業的な認知を与えたのは、多くの場合、婦人用時計であったと結論づけることはできる。